

宮沢賢治の信仰歷程

大 島 宏 之

賢治の生涯とその信仰を対比して眺めると、明確な時代区分を有することが判る。

(1) 幼時より自然に経を口ずさみ、信仰的感化を自己の習性化していた時期、明治三二年—明治四四年。

この時期の特徴は、賢治の動向が話柄として、逸話的に語られていることである。そのため上限は「年譜」の「三歳、浄土真宗の経典『正信偈』『白骨の御文章』を家人から聞いて暗誦」（宮沢清六編・『宮沢賢治全集』一二巻、筑摩書房、S 43）の項を取り、下限は賢治自身の証言（書簡・M 45・5 父宛、それ以前）を根拠とした。なお賢治の幼時期に関しては、詳細な聴聞が必要とされる。

(2) 家の信仰に同化し、真宗の敬虔な信者と為るべく懸命に努力した時期。明治四五年—大正四年。

この時期からは、その時代区分を書簡を中心として行なつた。同期の上限は、「無意識に小生の口に称名の起り申し候」（M 45・5）「小生も聞き読みかじりの仏教を以て大に横やりを入れ申し候」「小生はすでに道を得候。歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候。」（T 1・11）等の父宛書簡に見る賢治の信心の自覚の表白を起点とし、下限は、「年譜」の大正三年九月『法華経』を読むの項を別にする（「年譜」の作成年次によつて同項は、二、三年のずれ

が生じている。拙論「宮沢賢治と法華経」『印仏研究』二三巻二号参照、大正五年四月の高橋宛書簡に「聖道門の修業者」として努力していることが窺えるので、真宗の信仰のピリオドを一応大正四年とした。

(3) 『法華経』經典に出会い、自から選んだ信仰として、その信仰に邁進する時期。大正五年—大正九年中旬。

この期の特徴は、自身の内なる、批判力も抵抗力もない無菌状態の年代に培われた信仰態度を追い詰めつつ、真宗信仰との対比・対決の形態を内在していたことである。この間の特筆すべき事項には、父との信仰を繞る確執がある（拙論「賢治における家の宗教の問題」『印仏研究』二四巻二号参照）。賢治と父が信仰上の問題で対立を生ずるようなきざしを見せ始めたのは、阿部孝が、「幼年から培われた仏教への関心が高まりを見せはじめ、同時に早熟な精神的自覚があつた」と報告する（『中学生の頃』『四次元』一一巻一号）、盛岡中学四、五年の頃と思われるが、本格的論争が始められたのは、この期である。この区分の上限は、前述の『法華経』經典との出会いであり、下限は、国柱会信行部への入会をその境界とした。

(4) 日蓮上人に帰依し、田中智学の命に従つて、自らを投ずる、いわゆる猛進の時期。大正九年下旬—大正一〇年。

上限は前述。下限は、出京中妹トシ（家族中唯一の「信仰の道づれ」、宮沢清六著「兄賢治の生涯」二五〇頁、「宮沢賢治研究」筑摩書房、S 44）の病の報に接し（前同、二四九頁）、帰郷した時点を充てた。この期は、期間的に短い、大いなる生命の燃焼と、作品群の排出、親友（同信の徒）との訣別、無断の出京等、生涯におけるドラマチックな境遇の変化が齎らされた時期である。

(5) 自己の内的充実を目的としつつも、信仰を背景とした社会的発言を世に送り出した時期。大正一年—大正一五年上旬。

この期間は、賢治が花巻農学校に在職（大正一〇年一月三日—同一年三月末までの四年四ヶ月）した期間を示す。賢治にとつてこの時期は、「私も農学校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。……しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあつたのです。」（沢里武治宛書簡、S 5・4・4 付）と位置付けられる充実期で、生涯生業の問題で苦しんだ賢治が、職業の定着という意味でも安定期と呼べる時であつた。しかし周囲が賢治の直接的信仰活動を許容する状況に無かつた（拙論「賢治における家の宗教の問題」前掲参照）ため、周囲に向ける説得のエネルギー・力を社会という漠とした対象（不特定多数）に向け、『心象スケッチ・春と修羅』『イーハトヴ童話集・注文の多い料理店』との二著書刊行に託して、自己主張を行つた。この唯一の安定感に支えられた教員時代も長くは続かず、一箇所に定着出来ぬ賢治の性情（「兄は、いつでも何かを求め、新しいもの新しいものと考えて、多くの世界を持つていた」妹しげの証言、森莊已池著『宮沢賢治の肖像』一一九頁、津軽書房）を剥き出しにした。「学校をやめて一月から東京へ出る筈だつたのです。」（森佐一宛書簡、T 14・12・23 付）と書簡に見る如く、退職間際には、賢治の郷里在住の気持ちにも、不安定さが混入している。

(6) 郷里に骨を埋めることを覚悟し、農民と共に、生活の場での実践を通して信仰を深めていつた時期。大正一五年中旬—昭和八年。

農学校を退職した賢治は、花巻の郊外・下根子（祖父の代に療養のため建てた家）に移り住み、大正一五年八月、農民のための私塾「羅須地人協会」を設立した。賢治は居を構えるに当つて、土に塗

れた「本統の百姓」を目差したが、野の教師的存在に留まつた。この期で特に問題とされる点は、賢治の晩年に対する評価である。中村稔は、農村での賢治の挫折を顕著にしているが（「家について」『宮沢賢治研究』筑摩書房、S 44）、このような見方のみでは、死の十日前の教え子宛「書簡」（拙論「賢治における家の宗教の問題」前掲参照）に見る、信仰者らしい賢治の卒直な「懺悔」、病を押して死の二日前、長時間農民と肥料の相談をしていた（宮沢清六著「兄賢治の生涯」前掲、二五四頁）という行為等が、辻褄の合わないことになつてしまふ。やはりこの期は、次の飛躍を秘めた内省期と捉えるべきであろう。

父とは死の直前まで信仰上の和解は果せなかつた。(1) 従来から肉親を導くことの難しさが多々指摘されており、まして真宗の熱心な信者であり、そのことが社会的存在となつてゐる父に、改宗を迫ることは容易な業ではない。(2) 父から見た賢治の行状は、生業も持てず、何やら熱に浮かされる危げな存在と映つてゐた。(3) 賢治にとつて父は大いなる存在であり、故に語り合いもそれらの要素から、賢治の側に固さが生じ、意思の疎通を阻害してゐた。この様な状況下にあつたため、親子の真の出会いがなされなかつたものと思われ

る。

ともあれ賢治は、今生の別目で父に許され（宮沢清六著「兄賢治の生涯」前掲、二五五頁）、法華経信者としての一生を閉じ、静かに眠りについた。